

常燕生「老聃的逃亡」について

魯迅「出関」と比較しながら

魏 秀美

はじめに

国家主義派の文人、常燕生¹の処女小説が発表されたのは、1936年4月20日の中国青年党機関誌『国論』の第一巻第十期誌上においてである。作品は老子を主人公とした文芸小説であり、その題目は「老聃的逃亡」と称する。²老子を主人公とした歴史物語には既に郭沫若の「柱下史入関」(1923年)、魯迅の「出関」(1936年)がある。問題は、一体なぜ職業作家でもない常燕生があえてこのような小説を執筆し、提示したのかという、その動機である。彼をそうした衝動に駆り立てたものは何であったのか。また、彼は小説を通して、読者に何を示唆しようとしたのであろうか。

こうした問題を探究するにあたって、注目したいのが魯迅の「出関」との関連性である。冒頭で述べたように、「老聃的逃亡」の発表は1936年4月であることは間違いないが、実はこの作品の脱稿は1936年1月18日、即ち「出関」が雑誌『海燕』に発表された1936年1月20日の二日前である。もちろん、『故事新編』出版に際して「出関」に1935年12月作と加筆されているから、我々は「出関」が正確には12月に完成した作品であると知ることができる。しかし、「出関」と「老聃的逃亡」における、完成時期の接近と題材の一致という、この奇妙な共通性には何らかの関連があるのだろうか。(常燕生は1935年12月に上海を発つが、それまで両者は同じ上海にいた訳であるから、互いの動向を把握することは決して不可能なことではない。)あるいはそれは全くの偶然に過ぎないのであろうか。偶然であるとすれば、常燕生が35年秋に作品執筆に没頭し(小説の構想自体は8年前から着手していたが、途中筆を絶っていたという)

大部分をこの時期に集中的に書き上げたことになるが、このことは一体何を意味するのだろうか。

本稿ではこうした問題を念頭に置きつつ、魯迅の「出関」を意識して、常燕生の処女作「老聃的逃亡」を考察したい。

常燕生と魯迅の関係について

まず、常燕生と魯迅の関係について若干言及しておきたい。魯迅と常燕生を結ぶ共通の人物として高長虹の存在が挙げられる。高長虹は常燕生と同じ1898年生まれ、山西省の出身である。また常燕生は高長虹ら颯風社のメンバーであったとされる。³ 魯迅の日記によれば、この高長虹と共に常燕生が魯迅と対面したのは1925年4月17日であり、その後4月21日から10月24日までの間に、常燕生から魯迅に宛てて6度手紙が寄せられている。また魯迅からも5月13日に常燕生に宛てて手紙を寄せたことが確認される。この時期、常燕生は魯迅の『莽原』週刊にも参加していた。その年の末、政治的関心の強い常燕生は中国国家主義青年団（中国青年党）に入党し、以来両者には直接的な関りはほとんど見られない。いずれにせよ、1925年の一時期ではあったが、魯迅と常燕生との間にはこのように面識があり、接点があったことだけは確かである。

『道德経』を書き残さなかった老聃

老子を主人公とする郭沫若の「柱下史入関」、魯迅の「出関」、そして常燕生の「老聃的逃亡」に共通するのは、『史記』巻六十三、老子韓非列伝第三を素材として採用している点である。「老聃的逃亡」は、『史記』巻六十三の老子韓非列伝第三の以下の部分を下地として常燕生が脚色を施して創り上げたものである⁴。

老子は楚の苦縣厲郷の曲仁里の人である。名は耳、字は聃、姓は李氏。周の守蔵室の役人であった。孔子が周へ出かけたときに、礼について老子にたずねようとした。すると老子が孔子に向かって言うのには、「あなたは古来の礼について話題にしようとしているが、記し伝えられている礼はすべて、その実践者が死んで骨も朽ちてしまい、ただその言葉だけが今日に残っている、中味のないものである。しかもあなたは今の乱世に敢えて古礼を行うべきだと考えているようだが、心有る人間というものは、時を

得たならば高位に登って抱負を実行するが、時を得なければ位を捨てて流浪するものなのである。…あなたは、自分の持っている人よりすぐれようとする気構えと、多くの仕事をしたい欲望と、格好をつけ威厳を保とうとすることと、積極的なやる気とをみんな捨てなさい。これらはどれも、あなたの一身にとって何の足しにもならないのだ。私があなたに言ってあげることが、ただこれだけだ。」と。…老子は周の国に長いこと居たが、周の衰えるのを見て結局周を去ることになり、…立ち去った。その後老子がどのようにして身を終えたかはわからない。⁵

「老聃的逃亡」が他と決定的に違う点は『史記』の老子伝で最も傑出した箇所、即ち関所に辿り着いた老子が『道德経』を関尹に書き残して関所を出て隠遁するという伝説が全く作品に織り込まれていない所にある。周知のように「柱下史入関」は、関尹に書を書き残して隠遁した老子のその後を描いた架空の物語であり、老子が間もなく関所から再度中原に入り、自己の教えの欺瞞性を暴露するという筋書きであった。また魯迅の「出関」も関所を越えようとした老子が関所付近で一旦捕らえられ、道德経を書き残した後に関所を越えるものであり、「柱下史入関」であれ「出関」であれ、いずれも老子が記した道德経が登場するので、老子が道德経を書き残して隠遁するという『史記』の老子伝を踏襲していることがわかる。ところが、常燕生の「老聃的逃亡」に限っては、上の『史記』の引用部分が示すように、老子が書を残したという箇所を全く無視している。確かに『史記』に倣った「老聃的逃亡」で、老子が周の衰亡を察して牛に跨って立ち去るのだが、そこで老子は誰に逃亡を咎められることもなく、また何一つ残すこともなく、西の彼方、無の空中へと消え去るのみである。つまり、常燕生は老子伝説を小説の素材として用いる際に、その白眉ともいえる部分「老子が関尹に請われて道德経を著した」を意図的に外している。では、一体なぜ常燕生は自身の小説で老子伝のこの部分を割愛する必要があったのだろうか。

老子批判

その理由を示す前に、「出関」と「老聃的逃亡」における老子批判について言及しておきたい。

「出関」と「老聃的逃亡」は、孔子が老子を訪ね、礼を問う、両者の間で

問答が展開される、問答の末、老子が孔子に敗北を痛感して逃亡に至る、という共通の筋書きを持つが、老子が孔子に敗北する、というのは古典にはない。また、そこでは「無為」を老子本来の意図する「無為」としてではなく文字通り「何もしない」と解釈して老子を批判する共通性が見られる。

両者の小説はいずれも、老子が孔子に敗北したことが関所を出る直接的動機となっている。魯迅は「『出関』的 関」において、

孔子と老子が争って、孔子が勝ち、老子が負けたというのは、私の意見である。老子は柔を尊ぶ。「儒とは、柔である」。孔子も柔を尊ぶが、孔子は柔をもって進んでゆくのに、老子は、柔をもって退くのである。その鍵は、孔子が、「できぬことと知りながらやりぬいていく」、事の大小にかかわらず、同じようにゆるがせにしない実行者であったのに、老子は「何一つ実行しないでいて、何一つ実行されないままではない」、何にもしないで、ただ大きなことを言うばかりの何もしない空論家であったことだ。…そこで劇画化して、彼を関所から送り出し、少しも未練をもたなかった。…⁶

と述べている。「老聃的逃亡」の最後は、孔子との論争に敗北した老子の去りゆく姿を描写した後、「この世には只、青年孔邱の類の愚か者だけが残るのである。そこには依然として『できないことと知ってこれをする』がある」という一文を以って小説が完結している。

「老子」には柔弱が剛強に勝つという件が散見されるが、「無為而無不為」にある「無不為」こそ柔弱が剛強に勝つということを指す。そして、老子の処世訓「柔弱讓下」が一般に人の世の教訓とするならば、それは「如何なる状況にあっても一身の安全を保持する道」となる。⁷

つまり、老子は戦乱の世を生き延びる秘訣として、できうる限りリスクを回避し、身の保全を最優先する生き方を良しとするのである。その意味において、常燕生の主人公、老聃は生涯にわたり二度そのような人生を選択しているのである。一度目は武士として戦場で、二度目は周王朝の崩壊を予期して。何れも行動だけを取り上げれば、自己の保身を最優先していることがわかる。

以上のことから、孔子の処世訓「知其不可而為之」と老子の処世訓「無為而無不為」とを比較することで、老子の退却という消極的行動を批判し、孔子の「知其不可而為之」に見られる前進する積極的行動を評価するという点において、確かに共通の意図を有していたことが判然とする。

先ほどの常燕生が道德経を無視した理由については、「老聃的逃亡」では自身が提示した命題、即ち「知其不可而為之」の対極にある老子の「無為而無不為」を徹底的に批判する意図から、小説の主人公、老子は徹頭徹尾「無為」を貫く必要があった。ここでもし郭沫若や魯迅の小説のように老子が書いた道德経を土俵に上げて無価値なものとして批判したとすれば、老子が書を残すという、何がしかの行為をしたということが成立してしまい、もはやその振舞いは「無為」ではなくなってしまう。ゆえに、常燕生は老子の「無為」が象徴する消極的行動を批判したいがために、あえて道德経を著した行為そのものを無視し、「無為」(この場合は文字通り何も為さないという意味)を成り立たせる必要があったと考えられる。

「老聃的逃亡」が語るもの

「老聃的逃亡」は近代化に挫折した士大夫の精神構造を象徴する物語としての側面もあるように思える。そこで、未曾有の危機に直面した中国知識人の葛藤の物語という視点から、作品における老聃の心理描写を中心に考察してみよう。

かつて戦場から逃亡した武士が流浪の末に周に至り、そこで老聃を名乗り柱下史(図書館の役人)としてこの家に住み着く。以来30年間、平静な日々を過ごしてきた老聃は、初秋のある黄昏時に窓外の光景を見つめ、自身の生活範囲の外にある社会が日々刻々と変化していたことに気づく。眼前に広がる市場は活気に満ち溢れており、そこではかつていた農奴が自由に市場で商売をする一方、貴族が位を落として商人の身分に墮し、同じように商いをしている。さらに市場には一般の商品に混じって王の宝が売られていた。それらの光景から王朝の没落を察知した老聃の心はひどく混乱する。こうした筋書きについて言えば、あたかも膨大な文明を蓄積し、中華の優位性を信じていた知識人たちが西洋の衝撃を受け、危機意識を抱くのを暗喩しているかのようである。

彼はそれが王朝の衰亡という非常事態であると気づくや、過去の経験を洗いざらい調べ、必死で書物を紐解いて、同じような事例を探し出そうとする。

しかしそれを解釈することは出来なかった。彼は過去の無数の経験と書物の中に、同様の類似する情景を探し当てることはできなかった。...これは空前の非常事態である。然らばどのように変わるのか?なぜ変わるの

か？如何なる世界に変わるのか。彼は考えに考え、力を尽くして全ての過去の経験と書籍の中から同様の例を探し出そうとした、しかしながら彼は失敗した。…彼のそれまでの自信は揺らぎだし、自身を浅薄でちっぽけなものと感じた。彼は過去の書物や歴史が信じられなくなり、失望と懐疑の心情が次第に76歳の老人の心中に芽生え始めた。…⁸

ここで遂に老聃は古典や先例の中に正しい解答を見出すことができないと悟る。

従って、次に問題となるのは、こうした事実を認めてしまうことは士大夫としての権威の失墜を意味し、それが自己否定になってしまうことである。ゆえに老聃は苦悩する。

民衆に向かって周の礼が破産したと宣告すれば、間違いなく自己の名声地位の破産であり、旧社会の破産を宣告するのは、伝統への信仰に対して宣戦する勇敢な挙動である。…⁹

こうした絶望的な状況下にあって、突如として老聃の目の前に、この世の悲運を挽回するために立ち上がる孔子が登場する。その態度は苦悩の末に身の保全を第一に考えて逃亡する老聃のそれとは対照的である。

こうした老聃のような消極的態度をもって危機への対応策を模索すればするほど、よりいっそう危機が深まるだけで、何の解決策も見出せない。

ここで、常燕生は柔弱（即ち消極的・謙虚な処世術）が剛強（即ち理想に燃え、積極果敢に生きる生き方）に勝つ「柔弱謙下」という乱世における老子思想の処世術・態度を批判したかった。こうした「柔弱謙下」における最重要課題は、如何に失敗しないかである。それは失敗を恐れず、僅かな可能性に賭ける果敢な態度とは対極に位置している。

“老子”小説執筆の動機背景

ところで、常燕生がこうした小説を創作し、発表した動機は何であったのか。また、彼は小説を通じて、読者に一体何を示唆しようとしたのか。常燕生はそれまで小説を著したことなど一度もなく、また脱稿後、一篇の小説は十篇の論文よりも労を要すると自ら感想を語っている。¹⁰ あえてそうした労を厭うことなく、彼が小説を著してみせたということは、その中にこそ、彼の文学精神の

核が存在し、彼が抱く政治と文学の理想的関係が体现されていることを意味していると思われる。

なぜなら、この小説から十年ほど後の1945年、常燕生は青年党文化運動委員会主席として、ある企画を打出すが、その一環として「生物史観を観点とする集団主義・国家主義的純文芸性刊行物」を創刊しようという計画（但し、それは1947年7月に彼が急逝したことによって実現には至らなかった）を準備していたからである。¹¹ もちろん、それは彼が文芸的雑誌の出版、換言すれば文芸それ自体が文化運動にとって重要な役割を果たすと見なしていたからに他ならない。しかし、彼が1933年8月に著書『生物史観與社会』（大陸書局）を出版して以降、生物史観なる人生観に傾倒していったこと、1935年7月創刊の青年党機関誌『国論』における彼の一連の論文の中で、頻繁に生物史観や集団主義の用語を用いていたこと、またこの観点に立脚して文壇を批判する論説が僅かながら存在すること等を鑑みれば、この「老聃的逃亡」は「生物史観を観点とする集団主義・国家主義的純文芸」小説の実践、言わばその試作品だった可能性がきわめて高い。よって「老聃的逃亡」の意図を正確に把握するためにも、その「生物史観を観点とする集団主義・国家主義的純文芸」の性質について、今一度ここで常燕生の1935年当時の言説を引用しながら、確認しておく必要がある。

本刊に掲載されている文芸作品は芸術的内容を備えていることを基準とし、特定の方向性はない。但し、写実的な、人生的な、中国国民全体或いは部分の苦痛を忠実に描き出したものが望ましい。我々も今日の中国には、偉大であり、熱烈であり、進取であり、集団性と同情心に富んだ真実文学が多数あることを望んでいる。これらの文学は必ず浪漫の精神と写実の手法とを混合して作り出されるのであって、単純な主張ではできないのである。¹²

以上の定義にあてはめるならば、「老聃的逃亡」の主題は直面する国家存亡の危機に際して人が採るべき人生観であり、周王朝末期を時代背景として、「知恵の哲学者」老聃が、士大夫をはじめとする王朝の人々が、未だ誰も気付いていない王朝崩壊寸前の危機を察知し、これに苦悩する物語である。それは国家存亡の危機が切迫している状況下、全く無自覚な愚民の中で孤独に苦悩する先覚的知識人を婉曲的に表現しており、ゆえに中国の或る部分、即ち覚醒した知識

人の苦痛を描いたものである。逃亡する老聃の対極に熱血的な青年孔丘を据えることで、冷血と熱烈、後退と進取の二つの相反する人生観を提示し、この両者の対立構造から、孔子に象徴される熱烈かつ進取な積極的人生観を肯定してみせる。なおかつ中国史上の偉人である老子と孔子が登場人物であるから、この作品は必然的に「偉大な」要素をも備えている。

当時の文壇および社会思想の傾向について、今一度振り返ってみよう。周知の如く、一・二八を境として、国民党の左聯に対する政治的弾圧の激化から、文壇においてそれまで指導的地位を保っていた革命文学（いわゆる文学）から一転して文人趣味が横溢し、小品文学が台頭する。胡風は、当時小品文学の代表的人物であった林語堂を個性至上主義者と見做し、林語堂の「社会から退き内心に向かう要求」は明末公安派の詩人、袁中郎の「陶情怡性の人生態度」と合致すると批判したが、このように文壇では頹廢的作品の出現、現実回避から考古を尊ぶ古典復古、周作人を代表とする個性の極端な自由の主張といった傾向が顕著だった。

このような風潮に対し、魯迅は 1935 年 1 月、「近頃私は古典を読んで少しばかり本を書いてみたいと思っている。これら諸悪の根源をなす祖先の墓をあばいてやるのだ」との決意を語っている。つまり、魯迅が「出関」を著した意図は、巖修氏の説¹³によれば、社会の各階の悪しき傾向への暴露にあると同時に、歴史上の人物の再創造という芸術的形式を用いて、当時の社会思想の否定的側面 文壇における現実逃避的作品の氾濫、インテリの中に蔓延する虚無主義や闘争を放棄する民族悲観主義の風潮 を批判することにあつた。故にこうした風潮の諸悪の根源となる「退却する無為の哲学」たる老莊思想 それは中国の歴史上、インテリに甚大なる否定的影響を有するものとされる が現実の革命闘争にとって不利であるがゆえに、魯迅は自覚的にそれを脱却しようとし、批判しつづけたというのである。

一方、常燕生はどうであろうか。彼もこうした社会思想や文壇の風潮に対し危機意識を抱いていたことは間違いない。というのは、常燕生は自らの人生観として信奉していた生物史観、いわゆる社会有機体論に基づく歴史観から文学の最大の効用は社会集団意識の培養にあるとする一方、個人主義文学を社会進化の趨勢と相反する反動的なものを見なす。従って、先述のごとき文壇の状況を、彼は個人主義的潮流の蔓延と捉える。社会において、個人主義文化が過度に発達すれば、人々は個人の享楽や自由を競って求め、必然的に社会の綱紀

は解体を免れず、終局的にはこの社会は外来の集団意識強固な社会によって破壊され、征服されることとなる。この点に彼の危惧があった。だから、そこで問題となるのが、伝統思想たる老子思想、それ自体の教義内容云々ではなく、むしろ「退却する無為」行動の背景となる思想や哲学として機能する老子の「無為」思想だったからである。

但し、魯迅の主眼は主に文学者に向けられており、弾圧に屈しない積極性を作家に求めていたのに対し、政論家もしくは士大夫的な経世意識から、常燕生は国家全体が積極的に対外一致で抗戦（抗日）へと意識を結集させることを求めていたとの相違はあった。

おわりに

老子が関所を離れた当時は商工業の発達に伴って、周の封建制度は崩壊しつつあり、その下で道家の個人主義思想が次第に盛んになってきた時代である。周の封建制度を否定する老荘思想は個人主義的であり、国家権力の否定をも意図する無政府思想である。国家主義派においてはこのような消極的無抵抗、不爭主義を唱える老子の思想を反社会的、個人主義的であるとし、道家の祖である老子の逃避もまた反社会的・消極的態度として批判していた。¹⁴

「出関」や「老聃的逃亡」が著された1930年代半ばというのは、国民党政府による言論弾圧が厳重な時代である。文壇では一時流行した革命文学も廃れ、小品文学が流行するなど現実逃避的な風潮であった。魯迅も常燕生も、老子の虚無を語の意味通り何もないと解釈し、同じ古典を題材として老子を孔子に敗北させることで当時の社会に蔓延する老荘思想を批判した。このことはいかに老荘思想の消極的態度が当時の中国人の意識を支配し、近代化を阻むものであったかを証明している。

ただし常燕生の小説「老聃的逃亡」は、郭沫若や魯迅の小説のように独創性に富んだものではなく、古代の書物に新たな解釈を加えて焼き直しをしたにすぎない。従って、古典や先例から脱して独創的な解答を見出せなかったという点において限界があったことは否めない。

注

- 1 常燕生（常乃惠）1898～1947、常燕生は1925年末、陳啓天の紹介で中国国家主義青年団（中国青年党）に入党し、27年夏、機関誌『醒獅』の編集長に就任

以後、黨員として本格的に活動を開始する。その政治的立場は反ソ反共であるが、彼自身は私的には党派に関係なく国民党系、共産党系の人士とも交流があった。「出関」が雑誌『海燕』に発表された当時は既に上海を発ち（閻錫山機密秘書として）山西省太原にいた。

- 2 「老聃的逃亡」が掲載された『国論』では読者との通信欄が設置されておらず、残念ながら読者からの直接の反響をそこから知ることはできない。ところで胡適の研究によれば孔子と老子の年齢差は二十歳を超えるものではなく、また孔子が老子に会見した時の孔子の年齢は34～41歳であるという。（胡適著、楊祥蔭・内田繁隆・相川仁童訳『古代支那思想の新研究』、大空社、1989年2月、58頁。）胡適の説に従えば当時の老子の年齢は60歳以下ということになるが、「老聃的逃亡」では老子を76歳、孔子を28歳の青年と設定している。これは孔子と老子の人物像をより対極的にする効果を狙ったものであろう。
- 3 『魯迅全集』第19巻、学習研究社、1986年、522頁。
- 4 「老聃的逃亡」の下地となったのは『史記』巻六十三、老子韓非列伝第三である。但し、以下の部分は、魯迅の「出関」においては重要な場面として扱われているが、常燕生の小説では全く排除されている。
...関に至る。関令尹喜曰く、子將に隠せんとす。彊めて我が為に書を著せと。是に於いて老子迺ち書上下篇を著し、道德の意を言ふこと、五千余言にして去る。
- 5 日本語訳は、水沢利忠『新釈漢文大系 第八十八巻 史記八（列伝一） 明治書院、平成二年二月 55～56頁の通釈による。
- 6 魯迅「且介亭雜文末編・『出関』的 関」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1985年。
- 7 楠山春樹「老子の人と思想」、汲古書院、2002年7月、155頁。
- 8 常燕生「老聃的逃亡」『国論』第一巻第十期、1936年4月20日
- 9 同上
- 10 「老聃的逃亡」の文末に付された「作者附誌」より。彼は創作の際、常に崇高なる精神状態を維持しようと努めていたというから、その意気込みの凄さを窺い知ることができる。尚、ここで常燕生は「未だ読まぬ郭沫若、魯迅といった大作家の歴史小説に、ひょっとしたら、勝るとも劣らぬかもしれない」と述べており、彼が郭沫若の「柱下史入関」、魯迅の「出関」、何れも未読であったことが確認でき、言葉のニュアンスから常燕生自身にとって、この「老聃的逃亡」はかなりの自信作だったと推察される。
- 11 編者「為母一年」、『青年生活』第十九期、1947年9月1日。
- 12 「編完後記」、『国論』第一期、1935年7月20日。常燕生は創刊からおよそ半年ほどの間、『国論』の編集を担い、その間の雑誌は毎号、必ず編集後記を載せていた。この編集後記の筆者の名は記者或いは編者と記されているだけで、個人名が記されているわけではない。しかし彼の降板以降、編集後記が紙面から無くなったこと、また、彼の定評ある執筆能力とその几帳面な性格などから類推して、編集後記の筆者は常燕生と断定できる。以上のことから著者は、『国論』の編集後記をすべて常燕生の説として扱うこととする。

- 13 嚴修「魯迅の描いた老子 出関を論ず」、山本恭子訳『未名』2、1982年9月。
- 14 陳啓天「法家與中国學術」、『国論』1936年1月20日。